

平尾新田は大坂江戸堀《現西区》の平尾与左衛門が開発し、明和8年(1771年)に幕府の検知を受けました。その地域の中に「亥<sup>い</sup>」の年に開発されたことに因み、「亥開<sup>いびらき</sup>」と呼ばれる所《現在の南恩加島<sup>みなみおかしま</sup>抽水所<sup>ちゅうすいしよ</sup>あたり》がありました。この地名から名称を取ったこの「平尾亥開公園」の東側で木津川に面したところ《現在の南恩加島1丁目》に、明治41年(1908年)にペスト患者隔離所が新設されましたが、その施設は、明治42年(1909年)の北区の天満を火元とするいわゆる「北の大火」と呼ばれる火事で罹災した延べ約22,000人の市民を収容し、所内には小学校も開設されました。

その後、第一次世界大戦の結果、大正3年(1914年)11月、中国にいたドイツ兵などの捕虜<sup>ほりよ</sup>収容所が、日本各地(12箇所)に設置された時、大阪においてはこの施設が「大阪俘虜収容所」として使用され、軍人など760人を収容いたしました。捕虜は収容所にあつては、毎日の生活として朝夕2回の点呼を受ける以外の労働は特になく、娯楽として、読書、絵画、演劇、音楽、あるいはテニスやフットボールおよび器械体操などのスポーツを楽しみました。その様子を撮影した写真も現存しています。大正6年(1917年)2月、大阪俘虜収容所は閉鎖され、似島<sup>にのしま</sup>《広島市南区》へ移転しました。



『懐かしい大正区の風景』から転載

